デスティニー・クロス

笛吹水仙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
デスティニー・クロス

【Ｎコード】
Ｎ４０８０Ｙ

【作者名】
笛吹水仙

【あらすじ】
この世界の名はユーレント。今この世界には人知れず災厄が迫っている。そんなことは露知らず、今日もまた新たな運命が交差する…？数々の力有る“モノ”達の運命が交差し…！？どうなっていくのやら…
笛吹水仙、第一作

第一話：厄日…？（前書き）

いやぁ…ミスった…

ちょっとした間違いを訂正するつもりが元を消してしまいました…

（苦笑）

気を取り直してどうぞ！！

第一話：厄日…？

この世界、ユーレントは、多くの大陸、国が存在し貧富の差が激しく戦争の多い世界だった。「だった」と言ったように過去の話だ。今は、貧富の差も戦争も昔程ではなくなっている。その理由を語る前に、何故、戦争が多く、貧富の差が激しかったのかについて説明しよう。ユーレントには、人間が現れる以前より、魔物という凶暴凶悪な生物が存在していた。いや…凶暴凶悪は、誤りかも知れない。中には、人間に一切関与しないもの、共存を選ぶモノも存在したのだから…だが、ほとんどの魔物は人間に対して攻撃的であるため、生活必需品から、武器等を作るための素材集めが非常に困難であった。そのため、戦う力を持つ者が少ない国と多い国に貧富の差が見られるところが多くなり、大国は、より多くの利益を得ようと他国に侵略し、戦争が勃発しだした。この当時は、戦うのは、兵士だけ、それが当然の事だという考えがあり、兵士でない者達は、戦うという選択をしなかった。そして、この考えが変わり、兵士でない者達が戦うという選択肢を選んだことにより、戦う術が徐々に増え、貧しい国が減り、余裕が出来たことにより、国同士が争うことが少なくなり、それなりに平和な世界になったのだ。この変化は、運命だったのだ…来たるべき災厄に立ち向かうための……。ここまで、長々と語った後では、あるが、私について話そう…と言っても、私は有であり無、つまり、とても不安定で不完全な存在であるため話せる事などほとんど無いが…そんな私に出来ることは、この世界を見守り、この世界について語ることだけ…そう、たったそれだけなのだ――――

木々が生い茂る、エルダリア大森林に短い金髪を跳ねさせ、紅の瞳をした1人の少年がいた。

1人寂しく16度目の誕生日を祝っている気分的に落ち込んでいる俺。と言っても主な理由は先程まで見ていた夢が原因である。（何で今更、あの日のことを…）ーーーーー（「私は…私は、貴様を許さんぞ、レオン・エミリオン…いつか必ず報いを受けさせてやる…覚えていろ！！」）ーーーーーー夢に出てきた少女の言葉が、俺の寝起きのテンションを急降下させていた。そして…

「グオォォォォ！！」

「！？ちっ！何だってんだよ！！」

突如、森林を揺るがす程の雄叫びが上がった。そして、その音源は近くにいる。俺は、鞘から刀を抜き臨戦態勢に入った。その時

「グラァ！！」

木々を薙ぎ倒し巨大な銀色の毛を逆立てたウルフマン（二足歩行の人語を話す狼、大きさは通常、身長2m、体重は約100kgだが、今回のは3mは越えているように思われる。ちなみに体毛の色は住んでる場所により異なる。見た目は完全に狼）が姿を現した。

「たく…今日は厄日かよっ！！」

話が通じる雰囲気でない以上やるしかない…。俺はそう判断して一気に攻勢に出た。

「幻狼斬！！」

幼き日に師から習った最初の技ーーー己の闘気を狼の形として具現化してその爪と牙で相手を切り裂く技を放つ。咄嗟に己の爪で受

けるウルフマン。爪ごと切り裂く自信が俺にはあった。しかし…
「グルァ！！」
「なっ！？」
多くの魔物を切り裂いてきた俺の技はウルフマンによって容易く消し飛ばされてしまった。技を消し飛ばした勢いのまま俺に迫る鋭利な爪。
「ちっ！！」
咄嗟に刀で防ぐ、が衝撃は殺しきれず、吹き飛ばされる。
「グラァー！」
吹き飛んだ俺を追撃するべく飛びかかってくるウルフマン。
「調子に乗んな！」
「グルッ！？」
炎を纏った蹴り、紅蓮脚を人狼の顔面に喰らわせてやる。よろけるウルフマン、追撃とばかりに刀を振り下ろす———が、
「ガァァァ！！」
「なっ！？」
今までの動きとは段違いの速さで爪が閃き、俺の刀は宙を舞っていた。
「……」
「これは中々にピンチ…だな」
咄嗟に後ろに跳んで距離を取った俺だが、刀は運の悪いことにウルフマンの近く、正直、丸腰ではまるで歯が立たない。命の危機を改めて感じ、嫌な汗が止まらない。
「……」
「……」
ウルフマンが無言のまま姿勢を低くした。（来るか…）と同じく無言のまま俺は身体を強ばらせた———が、ウルフマンはそのまま凄まじい速度で何処かへ走り去ってしまった。
「…助かったぁー」
緊張から解放され体から力が抜けて倒れ込む俺。（何で退いてく

れたのかはわからんが…とにかく命拾いしたなぁ…さてと、これ以上、厄介な目にあわないためにも街に急ぐとするか！）て1人頭の中で語り俺は刀を鞘に納めて歩き出した。

「シオン、無闇に人を殺そうとしたらダメだよ？」
笛を持った小さな女の子が“シオン”に寄りかかりながら話しかける。
「グル…」
申し訳なさそうに身を小さくして女の子の体を支える巨大なウルフマン、シオン。
「反省してるならいいの…次からは気をつけてね？貴方は誰よりも強い。そして、優しいことが私の誇りなんだから♪」
「ガルッ♪」
女の子の言葉に嬉しそうに返事をするシオン。
「さ、そろそろ帰ろ？みんな心配してるかもだし…」
「ガオッ！」
女の子の言葉を聞き、己の背に女の子を乗せるとシオンは短く吠えると女の子に恐怖を与えない程度の速度で駆け出した。
「それにしても…あの人すごかったなぁ…本気じゃなかったと言っても、私のシオンとあそこまで戦えるなんて…思わず笛でシオンを落ち着かせるのを忘れちゃってた」
「グル？」

「シオンは思わなかった？あの人強いなぁ…って」
「ガルッ！」
「そっか♪シオンも思ったんだ♪私より少し年上みたいだったけど…また、会えないかなぁ…」
「？？？」
女の子の言葉に？マークを浮かべるシオン。
「あ、気にしないで？ただ、何となくまた会いたいなって思っただけだから…」
「ガル、ワォーン♪」
「え？…ありがとう、シオン♪」
女の子とシオンが何を話していたのか、それは当人達しか知らないことであった。

「それにしても…戦いの途中、綺麗な笛の音が聞こえたような…？」
今更、笛の音について考えているレオンであった。

第一話：厄日…？（後書き）

誤字・脱字の指摘、どうぞよろしくお願いします…

第二話：ギルド（前書き）

戦闘描写…うまくできたかなぁ…

と、不安ですがどうぞ！！

第二話：ギルド

この世界ユーレントには、多くの国が存在する…が実際には2つしか存在しないに等しい。その理由は、その2つの国、バルモジアとジブランダルの軍事力が古より強大でその影響が今も存在し、ほとんどの国がこの2ヶ国に属しているからだ。そして、バルモジアとそこに属する国々は帝国、ジブランダルとそこに属する国々は王国と呼ばれている。この両国の間では今も武力による衝突が起きており、その他にも内乱、紛争等も昔よりはその数を減らしてはいるものの、絶えないのであった――――～“ユーレント史”より～

俺、レオン・エミリオンは、今、ギルド（国に国民それぞれが持っている権利を返上し己自身で生きていく者の集まり）によって支えられる村、ナノハナの酒場で遅めの昼食を取っていた。

「ふぅ…ようやく一息つけたぜ…」

強力なウルフマンに襲われ、生死を賭けた戦闘のおかげで道に迷う羽目になりつい先程、やっとのことで森を抜けたのだ。

「だいぶお疲れのようですね、お客さん」

優しい表情をした壮年の店主が声をかけてきた。

「あぁ…異常なくらい強いウルフマンに襲われたからなぁ…」

そう愚痴をこぼす俺に「それは、お気の毒です…」と苦笑を浮か

べる店主。とにかく、今の平穏な時間を謳歌しようと考えていると…
「おい！！誰か戦える奴はいないか！？人手が足りないんだ！！」
そう大声で言いながら大剣を持った男が店に入ってきた。その男の言葉に反応して武器を持っていた者のほとんど…いや、全員が立ち上がり酒場を後にしていった。そして、一般の客は何事もなかったように食事等に戻っていった。
「何だったんだ…？」
訳がわからない俺がそう呟くと、
「ん？…あぁ…そうでした、お客さんは旅の方でしたね？こういったギルドに属する村や街では日常茶飯事の魔物か余所のギルドからの襲撃ですよ。心配なさらずとも、この村のギルドの方々は強いので大丈夫ですよ」
笑顔を浮かべて随分と物騒なことをさらっと言う店主。
「守られるってのは性にあわないし…食後の運動も兼ねて俺も参加して来るわ。ここのメシは中々うまかったぜおっさん」
そう店主に言って代金を払い、俺は酒場を後にした。

「派手にやってるなぁ…」
酒場を出てすぐに目に入ったのはぶつかり合う戦士達だった。先程、酒場から出て行った者達を含めて多くのこの村の戦士達が肩にドクロの刺青をした暗殺者のような対峙していた。（肩にドクロ…そういや、そんな殺しを請け負うギルドがあるとか誰かが言ってた

なぁ…）とか1人考えに耽っていると、目の前に刃が迫っていた。
「おっと…」
頭を相手のリーチの外に出して避け、カウンターに右拳をくれてやる。
「ぐっ！？」
呻いて崩れる男。（まずは、1人…）
「人のささやかな休息を台無しにしてくれたんだ…覚悟は出来てるよな？」
俺が静かに、しかし、視界に捉えている暗殺者達に聞こえる声量でそう言うと、3人の暗殺者達が向かってきた。それぞれが的確に急所を狙い剣を突き出す。俺は、すぐさま刀を抜き、
「遅いんだよ！！」
連牙斬（複数の斬撃を闘気により具現化して放つ技）を放つ。「「「ッツ！？」」」
まともに喰らい、声もなく倒れる暗殺者達。（手応えねぇな…数で攻めて来てるのか？）そう疑問に思っていると…。
「おめぇ、やるじゃねぇか」　声がした方を見ると、この村の戦士と思われる2人が倒れており、3人の戦士に囲まれた状態でこちらを見ている肩にドクロの刺青をしている男がいた。ボサボサの緑の短髪、瞳孔が常に開いてるんじゃ…と思われるほどに大きい金色の瞳、服は体に張り付くスーツに腰にはジャケットを巻き付け、所々に裂け目のあるズボンを着た男。その男は、他の暗殺者のように武器を持っておらず、隠している様子もない。（暗殺者集団の幹部か…？）考えていると…
「俺の名はグリム、ギルド“ファントム”ドクロ衆の幹部の1人…だ！！」
己の正体について語ると同時にグリムは跳躍した。
「ノロマ共がぁ！！喰らいなぁー！！」
グリムの叫びに呼応するように腰に巻いていたジャケットの腕の部分から大量のオクトパス（持ち主の意志通りに動く鞭の先に刃が

付いた左右４本ずつ計８本の触手状の暗器）が現れ、３人の戦士達を襲う。
「ぐぅあぁー！？」
「ぬぁーー！？」
「！？」
２人は両腕両脚を貫かれ悶絶し、１人は頭を貫かれ叫ぶ間もなく絶命した。
「さて…おめぇはどんな声で啼いてくれるんだぁー？！」
叫びながらオクトパスを動かすグリム。
「お前のいかれた趣味に付き合うつもりはないんだよ！！」
俺は、怒声と共に連牙斬を放ちオクトパスを弾き、グリムに向かって駆け出した。
「吹き飛べぇ！！」
気合いの一声を刀に乗せ振り切り、炎狼戦吼（闘気と己の炎の魔力を刀に込め、振り抜くことで凄まじい衝撃と炎を生む技）をオクトパスにぶつける。ドーンッ！？
「なっ！？」
オクトパスを残らず吹き飛ばされ驚愕の表情を浮かべるグリム。隙だらけのその顔に右ストレートを叩き込む。
「ぐぁ！？」
もろに喰らい倒れたグリムに、
「俺はお前を殺さない…が、この村の人達はどうか知らないぜ…」
そう言い捨てる俺にグリムは何かを言おうと口を開いた時ーーーーーザシュ！？
「！？」
グリムの後ろから伸びてきたバイソン（先に刃の付いた鞭、オクトパスの原点とも言える武器）がグリムの頭を貫き、その命を奪った。バイソンが伸びてきた方に目をやると、ツンツンに逆立った黒髪、開いているかわからない細目の少年が腕にバイソンを巻き付けて民家の屋根の上に座っており、その横には黒髪のショートカット、

感情が余り伺えない藍色の瞳の少女が立っていた。2人は少年がバイソンを自分の手元に戻すと同時に去っていた。（あの2人…何時からいたんだ…？）やるせなさと疑問を残したまま、暗殺者の残党狩りに向かった。

「“ファントム”の幹部って全員あんなに弱いのかねぇ～？」
先程の少年が隣の少女に問う。
「私に聞かれても…“ファントム”のことなんて殆ど知らないし…」
少し困ったようにそう返す少女に「だよなぁ…」と少年は呟き、
「まぁ、楽しく殺っていくさ～」
物騒な言葉を紡ぎ、少女はまたもや困った顔になり無言のまま2人は何処かへ疾走した。

全ての暗殺者を倒し、捕らえ終えた頃には日が暮れてしまってい

た。
「数だけはバカみたいに多かったなぁ…」
「まぁ、数だけでこっちの死人は幹部を名乗った奴にやられた1人だけだから、被害としてはマシな方だな…」
「あぁ…ロンの奴、死んじまいやがったんだな…」
「暗くなっても仕方ないだろ、弔いも兼ねて祭を開こう…ロンの奴も祭が好きだったんだから…」
「そうだな…よし！おーい、そこの手伝ってくれた旅の人、あんたも祭に参加しないかー？」
　各々が今回の戦いについて語り、グリムに殺されたロンという男の弔いも兼ねた祭を開こうということにした村の戦士達。その戦士の1人が昼までは、全く関わりのなかった俺にも声をかけてくれた。お互いに死人は1人ずつの戦いだったが血生臭い空気に気分を悪くした俺は、このまま旅を続けるのもどうかと思い、ありがたくその誘いに乗らせてもらった。
「我等の戦友、ロン・メドンの冥福を祈ると共に、今日の多くの者の生還を喜び宴を開催する！！」
　村長（驚いたことに酒場の店主）の言葉により、昼間からの血生臭い空気をなかったものにするかのように盛大な祭が開催されたのだった－－－－－－

第二話：ギルド（後書き）

どうでしたか？えっと、誤字・脱字、ここはこうした方が…といった指摘、感想等々、ありましたら、送ってくださいｍ（　）ｍ

第三話：討伐部隊！！様々な出会い…前編（前書き）

戦闘シーンが一応有り、少々血が舞います

苦手な方はお気をつけて…

第三話：討伐部隊！！様々な出会い…前編

“ファントム”とは、世界に悪名を轟かせる巨大な犯罪ギルドである。“ファントム”は、戦争の傭兵を主に請け負うギルバート率いる“コフィン”の部隊と、暗殺を主に請け負うシャルル率いる“ドクロ”の部隊の２つからなる。この２名の名前と性別、武器しかわかっていない、大規模ながら謎多きギルドである。ちなみに、ギルバートは、紫色の長髪と碧眼が印象的な優男、武器は大剣。シャルルは、長いストレートの白髪、威圧的な黄金の瞳に、厳つい顔に合った威厳のある顎髭が特徴的な大男で、武器はこれまた巨大な大斧。どちらも超Ｓ級の賞金首であり－－－－－～危険なギルドの一部より～

「ここか…」

俺、レオン・エミリオンはある建物の前で立ち止まった。横の看板に“ファントム討伐部隊集合所”と書いてあるのを見て確認して俺は扉を開いた。

そこには、俺を含めて１１人の男女がいた。

１人は、ハンマーを背負った厳つい顔のドワーフ（人間より背丈が低くがっしりした体つきの頑丈な種族）の老齢の男。

１人は、レイピアを提げた綺麗な翠の髪をしたハーフエルフ（人

間とエルフのハーフ、人間と同じような体格で美形が多く、寿命は人間よりもかなり長い。魔法が得意な種族）の美形の男。
１人は、杖を持った青髪の人間の少年。
１人は、様々な種類の杖を背負った顔を隠す様にスカーフを巻いた者。　１人は、片手に杖、片手に書を持った明るい赤髪が印象的な人間の美少女。
１人は、大剣を背負ったキツい顔付きのピンク色の髪で隻眼の人間の女性。
１人は、短銃を４丁腰に提げ、長銃を１丁背負ったピンク色の髪の無表情な人間の少女。
１人は、ランスと盾を背負った金髪の人間の青年。
１人は、剣を携えた他とは比べモノにならない威圧感を持った銀髪の顔に戦闘の傷を色濃く残した人間の男。
１人は、異様な空気を纏った鎖のついた巨大な鎌を４本背負った、長い黒髪と狂気を秘めた紫色の瞳が印象的な人間の青年。
ここにいる誰か１人を除いた者達が俺が請け負った依頼。“ファントム討伐”の参加者だ。俺が入って、周りを見回していると、依頼者らしき威圧感を放っている白髪の男が床を鞘で叩いた。
「全員が揃った様なので指示を出させてもらう」
威圧感を大いに含んだ言葉は更に続く、
「まず、君達にはこの紙に書かれた箇所から目標の捕獲、もしくは殲滅を行ってもらう。殲滅も帝国騎士団の団長殿より許可を得ている。なので、その時は一切の遠慮はいらない…わかったな？目標は２９名の“ファントム”のコフィン部隊だ。幹部クラスはニコライ、マッヂ、シアの三名を確認した。油断をせず確実にこなしてほしい。話は以上だ」
俺を含めてこの場の１０名が何を聞いても無駄と判断を下し、それぞれ紙を受け取り、それぞれ紙に記された場所へと移動した。

「やぁ、同じ地点から行動を開始するようだね。あ、名乗るのを忘れていた。私の名はウェルター。君の名は？」
金髪のランスと盾を背負った青年ウェルターが俺に名を聞いてきた。
「俺は、レオン。レオン・エミリオンだ」
簡潔に答えながら俺は小さな男の子との約束を思い出していた――――

俺がギルドの街、カルトラで依頼板（依頼の内容、報酬額等が書いてある紙が貼られている板）を見ていると…
「あの…」
「ん？」
声がした方を見ると１０にも満たないであろう幼い男の子がこちらを見つめていた。男の子は口を開き、
「お兄ちゃん…剣持ってるけど…強いの？」
「剣…？これは刀だ。後、俺が強いかはわからん。何を持って強い、弱いと決めるかわからんからな…と、それより、俺に何か用か？」
男の子の間違いを訂正しながらそう問うと、
「ニコライって奴を殺してほしいの…ボクのお父さんをお母さんを

妹を殺した…あの男を！！」
男の子の声には痛々しい負の感情が溢れんばかりに籠もっていた。
家族を理不尽な暴力によって奪われた男の子のその殺意は仕方のないものだろう…俺はそう思った。そして、それと同時にその願いを聞き入れようと思った。
人の命を無闇に奪う輩への怒りと男の子の負の念を感じたことが俺に男の子の願いを聞き入れさせたのだ————

「そろそろ突入の時間だな…一つ言っておく、ニコライは俺が殺る。邪魔はしないことを勧める」
俺の殺気を孕んだ言葉にたじろぎながらウェルターは「わかった」と頷いた。ウゥゥー！突入を告げる音を聞き俺とウェルターは無言のまま“ファントム”の者達が待つアジトへと疾走した————

～Aルート～
「はっ！！」
「ぐぎゃっ！？」
ピンク色の髪で隻眼の女性、ラリラナは敵一人の命を大剣の一撃で絶ち、
「……」
「ぐあっ！？」
「ぎゃ！？」
ピンク色の髪の銃を持った少女、ラリアナは無言のまま引き金を引き2人の命を奪う。ピンク色の髪が特徴的な姉妹コンビは着々と敵を倒し進んでいた。情報よりも数を増やしている“ファントム”のコフィン部隊の数を減らしながら…

～Bルート～
「ふんっ！！」
「！？！？」
ドワーフの老人、ダイトンのハンマーが敵を叫ぶ間もなく叩き潰し、
「そこっ！！」
「っ！？」
ハーフエルフの青年、アルフィンのレイピアが的確に敵の急所を刺し貫く。こちらの即席コンビも着実に敵の数を減らしながら奥へ奥へと進んでいた…

～Cルート～
「…フレイムランス」
炎の上級魔法フレイムランス（炎の巨大な槍を敵にぶつける。ぶつかると同時に爆発する魔法）を静かに詠唱破棄で放ち2人の敵を灰に変えた様々な杖を背負っているスカーフで顔を覆った男、ハイネ。
「雷よ…ライトニング！！」
「ぬぁ！？」
雷の下級魔法ライトニング（一筋の雷を敵に落とす魔法）を放ち敵1人の意識を奪った青髪の人間の少年、ジョシー。師弟関係にある2人もまたA、Bルートの者達と同様に敵の数を減らしながら奥へと歩んでいた…

～Dルート～
「氷よ！」
たった一言の言の葉で氷の上級魔法のアイシクルランサー（氷の騎馬隊を召喚し敵にぶつける魔法）を放ち5人の敵を吹き飛ばした片手に杖、片手に書を持った明るい赤髪の人間の少女、リアナ。
彼女は1人で奥へと向かっていた…

～Eルート～
「ククク…ァ、ハーハッハ」
両手に柄に鎖が付いた巨大な鎌を持ち、背に同じ鎌を日本背負った黒い長髪、狂気を秘めた紫色の瞳を持つ男、ヤイバが“ファントム”のコフィン部隊の者達であった１０の肉塊の中心で笑っていた。多くの骸を築いたその鎌にも身体にも大量の血を付着させ、その血の臭気に咽ぶことなくヤイバは笑っていた…

～Fルート～
「そらよ！！」
「うぎゃっ！？」
ウェルターのランスの一突きで情けない声を上げ倒れる敵、
「も一つ！！」
「ぬぁっ！？」
巨大な盾をもろにぶつけられ吹き飛ぶ敵、
「……」
それを横目で確認しながら俺は一つの技を放った。
「「「「うぉぉぉ！！」」」」
４人の敵が雄叫びを上げながら向かってくるが、俺も、俺の技が見えていたのであろうウェルターも敵を無視して先へと進む。そして――ザン！！という音と同時に４人は固まり、音を立てて倒れ伏し、その身体から炎を上げ絶命した。
俺の放った瞬炎（炎の気を纏った居合いの技）の熱気を背に受けながら俺とウェルターは先へと進んだ。
暫く進むと、道が二手に別れていた。
「レオン君、ここで一旦お別れだ。必ず生きてまた会おう」

「あぁ、次は依頼を果たした後だ」
このアジトに居る“ファントム”のメンバー全ての捕縛、或いは殲滅という依頼を果たすべく別れ道があった場合は別れて進むのが原則の様な状態の中、俺は右の、ウェルターは左の道を選び一時の別れの言葉を交わし、俺は右の道へと歩みを進めた。
その同時刻にA、B、Cルートの面々も別れ道に差し掛かりそれぞれが別の道へと進んでいた。
こうして、討伐部隊の面々は、１０人がそれぞれ一つの道を進むのであった…

〜ウェルタールート〜
敵に出会うことなく“ファントム”の一アジトの道を進むウェルター。
その前から、リン、リンと鈴の音を鳴らしながらオレンジ色の長髪を揺らしながら、目を閉じた少女が近付いてきた。その手にレオンの物より短い刀、脇差しを持っていることと周りの異様な空気に気付いたウェルターはすぐさま臨戦態勢に入った――が、その時にはもう遅かった。気付いた時には目の前に少女の顔があり、開かれた緋色の右目には自分の姿が映り、そして、次の瞬間には意識が永遠の闇へと落ちていた。
少女、シアの一太刀により頭を斬り跳ばされ血飛沫を上げ倒れたウェルターだった肉塊。返り血を気にせずシアはその場を去っていった。
先程交わされた再会を誓う言葉は無情にも打ち砕かれたのだった――――

〜ハイネルート〜
「…ファイヤーマウンテン」
詠唱破棄で放たれる炎の上級魔法ファイヤーマウンテン（その名の通り炎の山を創り出し、その中に敵を閉じ込め爆発する魔法）その中には一つの影があった。
「消えろ」
その一言と共に、爆発する炎の山。影の姿も消え、跡形もなくなったかと思われた、が…
「そんだけか…？もう、飽きた…そろそろ喰うぜ？」
「っ！？」
声がするや否や爆炎から腕が伸びハイネの首をつかみ宙吊りにする。
爆炎が消え、声の主の姿が現れハイネは絶句する。その身体にはハイネが放った三つの魔法による傷の後などなかったからだ。現れたその声の主、ギルバートからの連絡を伝えにきた“ファントム”コフィン部隊の幹部バノッサ、細身だがその身体にハンパない力を秘めた男。オールバックの黒髪の乱れを左手で直しながら徐々にに右手に力を込めていく、ハイネの顔が苦悶に歪み、そして———
「じゃあな」
ゴキッ！？不快な音を立て首の骨とハイネの命を砕いた。
「さて…ニコライの野郎はどこにいるんだ…？」
と誰に問うでもなく呟きハイネの骸の下から去っていった———

～ヤイバルート～
「くたばれや！！」
殺意の籠もった言葉と共に屈強な角刈りの大男、マッヂは大剣を振り下ろした。
「おっと」
それを軽く避け反撃にと右手の鎌を振り下ろすヤイバ。
その鎌を左手でつかみ、ヤイバの手から奪い投げ飛ばすと同時に右手に持った大剣の重い一撃で左手の鎌も吹き飛ばされ、すぐさま背中の二本を抜き構えるヤイバ――が、
「力が足りねぇんだよ！」
その言葉と共に振り上げられた大剣により、最後の二本まで弾かれたヤイバ、しかし、表情は終始変わらず狂気を秘めた笑顔のまま、その手に鎌がなくなった時でさえ…
マッヂは、それを一切気にすることなく、
「シネー！！」
勢いよく大剣を振り下ろした――ザシュ！！音と共に血飛沫が上がり辺りが血に染まり臭気が充満する。そんな中、
「ククク…いい香りだ…クク、ァ、ハーハッハハ」
ヤイバが血に濡れながら笑っていた。手には４つの鎌が上手く組み合わさって巨大な手裏剣になった血まみれの武器を持って首が転がり、身体は無様に倒れ血飛沫を上げるマッヂの骸の前で長々と笑っていた――――

１０人の内、２人を失いながらも敵の要の１人を破り討伐部隊は

進んで行くーーーーー

第三話：討伐部隊！！様々な出会い…前編（後書き）

どうでしたか？

感想等ありましたら、どうぞ送ってください。待っています。

では、また何れ…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4080y/

デスティニー・クロス

2011年11月27日23時46分発行